

景徐周麟の詩文における「鷗」
——その隠逸の性格について
"the gull" in the Shurin Keijyo's literary works :
its symbol of hermit

武 穎
WU Ying

摘要

In the Chinese literature, the character of " the gull " has taken root after a long development process, especially from the Tang dynasty to the Song dynasty. Shurin Keijyo is a late literary author of Literature of the Five Mountains(Gozan bunngaku), in whose works " the gull " and its related terms often appeared. Shurin Keijyo 's work shows the taste of concealment and expresses his ideal intention of " Retire into books ", and with a longing for concealment, he embraced the eagle. This paper tries to clarify a part of the hidden thought by examining the image of " the gull " in the literary works of Shurin Keijyo based on the previous research. This paper will be divided into three parts for further study. First of all, from the noble and unsullied image, the spirit of the cold and clear character is clarified. Next, we will focus on the character of "Bouki (with a mind free of schemes) " especially the expressions of "surprised gull" and "no gull" in Shurin Keijyo 's literary works, and clarify the appearance of a hermit who is entrusted to eagle and who has left the world. Lastly, I will mainly examine his literary works related to "rivers and lakes ", clarify the image of "idle gull" and "discerning gull", and examine the aspect of hermit in Shurin Keijyo 's own spiritual world.

In the latter half of Gozan Zenrin, Shurin Keijyo had a high position in political affairs, temple affairs, and literary affairs, and in reality it was impossible to retire, so he could maintain his mental equilibrium even in the mundane world. It is a unique retirement method. As an important temporary deposit, "the gull" had become a herald in the world of calligraphy and painting, and made him aware of the the way to retire into books.

キーワード：景徐周麟 書隱 鷗 忘機

Keywords: Shurin Keijyo retirement into books the gull Bouki (with a mind free of schemes)

はじめに

景徐周麟（一四四〇—一五一九）、俗姓は佐々木、諱は周麟、道号は景徐、半隠、宜竹、対松など、文明十八年（一四八六）から景德寺、相国寺住職、相国寺鹿苑院塔主と僧録、等持寺住職などを歴任した。五山文学後期の代表的作家である。その作品集である『翰林葫蘆集』に

は詩、字説、道号などをはじめとする各種の漢詩文が収録されている。

景徐周麟は文明十四年（一四八二）四十三歳の時に詩「書隱」三首⁽¹⁾（第三卷）を書き、長年隠逸を志向してきた上で、「書隱」を自らの隠逸方法と決めた⁽²⁾。特に、其の三においては、書物との交歓による隠の実現を詠み込んでいる。

大隱宜書小隱山、 大隱書に宜しく小隱は山に
 家三萬軸一身閑 家に三萬軸あり一身にして閑かなり
 賦其松菊辭其桂 其の松菊を賦して 其の桂を辭し
 有友卷中頻往還 友有り卷中頻りに往還す

「家三萬軸」は韓愈の詩「送諸葛覺往住隨州讀書」⁽³⁾に拠ったものであり、膨大な蔵書を指す。大隱が朝廷や市場に隠棲するのに対して、小隱は山林などに隠棲することであるが、景徐周麟は書物の世界に隠棲し、文字を弄り、書物と戯れることを自らの「大隱」と定義し直している。松、菊と桂は中国文学ではよく現れ、高潔な象徴とされる。景徐は「書隱」詩によって、読書、文筆業に励む態度を示す一方、松、菊や桂などと友になり、精神世界において隠逸することを表明している。

そして、景徐周麟の作品には、「鷗」が頻出し、そこには作者の理想の人生が仮託されている。『翰林葫蘆集』には、詩三十一首、道号一首、疏五首、文一篇に「鷗」があらわれる。そのほとんどは、景徐周麟の隠逸志向と関連した内容となっている。そのため、景徐周麟の隠逸志向を深く読み解くためには、その「鷗」のイメージを考察する必要がある。

鷗は、五山文学全体においても頻出の素材である。中川徳之助氏は、「白鷗」考において、五山文学の「鷗」は中国文学のイメージを受容し、その観念形象は「忘機」、「信」、「潔」、「閑」、「隠」という五つに大別されるとした。その中でも「忘機」が最も基本的な性格で、そこから「閑」の属性が派生し、「閑」を基礎として、「信」と「潔」があり、また「隠」もある⁽⁴⁾という。本稿では、この観念形象の分類も参考にしつつ、景徐周麟の詩文における鷗を分析したい。

1. 高潔な鷗

景徐周麟にとって鷗とはまず高潔なものであり、それは儒の精神とも関わりがあったようである。景徐周麟にある僧侶に天覚なる道号を与えた際に書いた文章がある。その道号「天覚」（第二卷）は、石見（島根県）に住む禅僧が道号を依頼したことに応じた作で、執筆時、仲介者が与えた情報が、軒に鄰鷗と扁した（扁額を掲げた）ということだけであり、景徐は「祇言彼所居之軒扁隣鷗。予聞之而謂、徳不孤必有隣。白鷗比徳於玉者也、其執友已如此、其立志者可見也……（祇だ彼の居る所の軒を言ひて 鷗隣と扁す、と。予之を聞きて謂ふ、徳は孤ならず必ず隣有り、と。白鷗は徳を玉に比する者なり、其れ友を執ること已に此くの如く、其

れ志を立つるは見るべきなり……)」と述べ、『論語』里仁にある言葉「徳不孤必有隣」を引き合いにだして、鷗を友人とすること、すでにかくの如し（扁額に鷗鄰としたこと）で、そのような立派な志を立てていることは見所があると判断している。「白鷗比徳於玉者」は楊万里「演雅六言」の句「白鷗比徳於玉（白鷗 徳を玉に比す）」⁽⁵⁾に拠ったものである。これに続いて、景徐は文中において「宋人有鷗鳥之論、其翻玉羽點春苗、不免口腹之累者浦鷗也、其清影脩然、不爲泥滓所點染者海鷗也（宋人に鷗鳥の論有り、其の玉羽を翻して春苗を點じ、口腹の累を免れざる者は浦鷗なり、其の清影脩然として、泥滓の點染する所と爲らざる者は海鷗なり）」と述べている。ここの宋人の論というのは、宋・羅大経が著した筆記『鶴林玉露』甲編・卷五「浦鷗」⁽⁶⁾に見えるものである。『鶴林玉露』には、先の景徐周麟の文にある引用に引き続き、「以興士當高舉遠引、歸潔其身如海鷗、不當逐逐於聲利之場、以自取賤辱若浦鷗也。（以て興士は當に高舉遠引して、其の身を潔に歸すこと海鷗の如くすべくして、當に聲利の場に逐逐として、以て自ら賤辱を取ること浦鷗の若くすべからず。）」とあり、景徐は鷗でも『鶴林玉露』に基づき、浦鷗ではなく、海鷗を高潔なものとしていた。景徐の疏「叢茂彦住眞如」（第一卷）の文末では、叢公禪師のことを「徳必有隣、飄然鷗道人（徳は必ず隣有りて、飄然たる鷗道人なり）」と讃え、徳がある道人として「鷗道人」と呼んでいる。

景徐周麟は、鷗の高潔さを詩にも詠み込んでいる。「松鷗二首」其の二（第三卷）をあげる。

青松白鳥歳寒同 青松白鳥 歳寒同じくし
 屋似江湖月一蓬 屋は江湖に似たりて月一蓬
 從此寄棲能擇木 此れ従り棲を寄するに能く木を擇ぶべし
 風吹世事入山中 風は世事を吹きて山中に入る

一句目の「白鳥」は平仄のため「鷗」の代わりに「鳥」となっている。白い鷗は青い松と同じく、歳寒精神があるというのだ。「歳寒精神」とは、『論語』子罕の「歳寒、然後知松柏之後凋也（歳寒くして、然る後に松柏の凋むに後るを知るなり）」⁽⁷⁾を出自とし、中国では、松、竹、梅を「歳寒三友」と呼ぶ。『翰林胡蘆集』では、この歳寒精神がよく論じられている。景徐の文「三益齋詩并序」（第七卷）の序文では、「且松之生也、貞堅、竹之生也、挺特、梅之生也、優而潔、又皆歴歳寒而不改其操（且つ松の生ゆるや、貞堅なり、竹の生ゆるや、挺特なり、梅の生ゆるや、優にして潔なり、又皆歳寒を歴て其の操を改めざるなり）」と歳寒三友の松、竹、梅それぞれの特徴を論じ、その寒さに耐え、節操を変えない品質を称揚し、儒家の称える君子の品格とつなげている。中川氏は、鷗と「歳寒」の関連を詠み出す詩は五山にはあるが、中国には尋ね得ていないと指摘した。景徐をはじめとした五山僧たちは、白鷗の白から、高潔さのみならず寒さを連想したのであろう。他、景徐の詩「栖霞齋」（第六卷）には、「天地江鷗知己者 古今越雪舍吾誰（天地の江鷗 己を知る者 古今雪を越えて吾に舍るは誰か）」とあり、雪の中にも来てくれる江鷗は実に知己であるとの感嘆を詠じ、寒さと雪と白の要素を鷗に込めている。

このように、景徐周麟詩文における鷗は「潔」であるということから、他の五山僧にはみられない「徳」の観念形象までも有しているとされる所に特徴がある。

景徐における高潔なる鷗は、歳寒三友のみならず、水や春水とも一緒に詠じられる。黄庭堅の「清閑處士頌」⁽⁸⁾に、「水之爲物、甚寒而極清（水の物と爲るは、甚だ寒くして極めて清し）」とあるように、水には、「寒」と「清」の特徴がある故、歳寒に耐えられる鷗は、水鳥ということもあり、清らかさの象徴として水が配されるのだろう。そしてそこでも人物の高潔さと結びつけられている。

例えば、詩「便面」（第三卷）を取り上げる。便面とは、顔を覆い隠すのに使ううちわや扇のことである。扇面などに図画が描かれているため、それを鑑賞しての詩作は「便面」と題される。五山文学では「便面」や「扇面」詩が多数書かれている。

十八人同時社友	十八人は同時の社友
二千尺直下飛流	二千尺あり直下飛流す
認緇辨素摠皮相	緇を認め素を辨じて摠べて皮相
廬岳高僧春水鷗	廬岳の高僧 春水の鷗

便面詩においては、起、承句は図画の光景を描き、転、結句は作者の連想などとなることが多い。この詩は、起句、承句で便面に描かれる廬岳高僧と廬山の名瀑を詠み上げる。起句の「十八人」とは東晋、廬山における慧遠法師を中心とした僧俗を描いた「廬山十八賢」のことである。宋の李公麟は「蓮社十八賢圖」を描き、その同じ題材を描いた作品は室町禅林においても収蔵され、鑑賞されていた⁽⁹⁾。承句は李白の詩「望廬山瀑布二首」其の二⁽¹⁰⁾の「飛流直下三千尺」を意識した表現である。転句における緇と素は、僧侶と俗人の意味であり、僧侶だとか俗人だとかいった区別はまったく表面的なものであることを強調している。結句では、景徐は敢えて便面に描かれていないだろう鷗を連想し、「春水鷗」のように高潔な廬岳高僧のことを詠出し、山林に隠棲しながら、求道や修行に励む十八賢を称賛している。

景徐の「清仲字説」（第七卷）では「上世之人、稟性純清、而自然不沈酣於利祿聲色……噫 水必至於海、而會其極者也、淳也清其心、而不容私欲於其間、循其性之所順、而至於道之極……（上世の人、稟性純清にして、而して自然に利祿聲色に沈酣せず……噫 水必ず海に至りて、而して其の極むる者に會ふなり、淳また其の心を清めて、私欲を其の間に容れず、其の性の順ふ所に循り、而して道の極に至る）」と述べ、太古の人の純清な性格を称え、心が「淳」「清」であればこそ、「利祿聲色」などの私欲を許さず、本性を守りつつ、「道之極」に達するのだと主張する。景徐の詩において、水、春水と喩えられる鷗は、水の清らかな品質があり、作者の思う道の極に至る。よって、「春水鷗」も景徐にとって、求道人の象徴なのではないだろうか。

本節では、景徐周麟の鷗詩に見られる俗塵に染まらずに高潔で、清らかな鷗のイメージについてまとめたが、景徐は海鷗、春水鷗などのイメージを借りて、徳が重要であることを主

張している。この高潔な鷗というイメージは、一般的にはここで紹介したような儒家的なものであるというよりは、本来は道家經典『列子』に遡れるものであり、その「忘機」の典故は、日中とも鷗の詩文に頻出するものである。引き続き、景徐周麟における「忘機」の鷗を検討する。

2. 忘機の性格

2.1. 鷗鷗

中国古典詩文において鷗は『列子』皇帝篇⁽¹¹⁾にある故事から派生した「忘機(邪念を忘れる)」の典故を帯びて表現されることが多い。

海上之人、有好漚鳥者。每旦之海上、從漚鳥遊。漚鳥之至者、百住而不止。其父曰、吾聞、漚鳥皆從汝遊、汝取來。吾玩之。明日之海上、漚鳥舞而不下也。

海上の人に、漚鳥を好む者有り。毎旦海上に之き、漚鳥に従ひて遊ぶ。漚鳥の至る者、百住にして止まらず。其の父曰く、「吾聞く、漚鳥皆汝に従ひて遊ぶと。汝取り來れ。吾之を玩ばんと。」明日海上に之くに、漚鳥舞ひて下りず。

そして、列子は「故曰、至言去言。至爲無爲。齊智之所知、則淺矣。(故に曰く、「至言は言を去り、至爲は無爲なり。齊智の知る所は、則ち淺し」と)」すなわち、最高の雄弁は言葉の不使用によってなされ、最高の行為は無爲によってなされる、凡人の知恵が及ぶところは深みがないと指摘している。

下心がなく、純粋な人でない限り、鷗と戯れられないことから、鷗は「忘機」という性格と関連づけられてきた。この『列子』の忘機と鷗の典故ははやくは南朝宋・謝靈運の「山居賦」⁽¹²⁾には「撫鷗儵而悅豫 杜機心於林池(鷗儵〔『列子』にでてくる鷗や『莊子』に出てくる儵)を撫して悅豫し 機心を林池に杜づ)」の句にあらわれ、鷗と戯れるには機心を忘れる境地が必要であるとされてきた。他、唐代李商隱「贈田叟」⁽¹³⁾詩に「鷗鳥忘機翻浹洽 交親得路昧平生(鷗鳥 機を忘るれば浹洽に翻り 交親 路を得れば平生に昧し)」とあったり、宋代の詩詞にも頻出し、「鷗鷗忘機」という琴の曲まで作られ、「鷗鷗」の縁語も大いに流行していた。五山においても鷗が「忘機」と関連することは広く認識され、義堂周信の「海翁説」⁽¹⁴⁾(『空華集』第十五卷)には「昔者東海之沂有翁忘機者、鷗之來狎者數百、一日易慮焉、則鷗鳥也不復來矣(昔東海の沂に翁の機を忘るる者有り、鷗の來たりて狎る者數百、一日慮を易ふれば、則ち鷗鳥も復た來らず)」と『列子』を敷衍した説明がある。ところが、景徐周麟の詩文には、鷗に関して、「忘機」、「機心」などの表現自体は一つもなく、これはかなり珍しい。ただ、その詩には、「鷗鷗」の表現が多く用いられている。中川氏の指摘によれば、「鷗鷗」とは、「忘機」ではない人間に接した鷗の驚く姿であり、「驚」も「忘機」と関連する表現だとい⁽¹⁵⁾う。ここでは驚く鷗の例として、詩「又(便面)呂望」(第四卷)を取り上げてみたい。

絶叫文王上釣竿 絶なり文王をして釣竿に上ぼし

驚他驚聽與鷗看 他の驚聽と鷗看とを驚かす
 青雲忽載後車去 青雲忽ち後車に載せて去り
 不似苔痕片石安 苔痕片石の安んずるに似ず

承句の鷗や鷺が見聞して驚く光景が実際に便面に描かれていたのか、作者の想像によるのかは不明であるが、作者は承句の表現を借りて、呂望は文王の車に乗って行、文王を補佐し、青雲の路を歩んだということで、景徐は呂望が苔むしたひとかけらの石のように安穩な存在ではなく、もともと野心を込めて釣りをしていたのだと主張している。

景徐による鷗と鷺が驚いたという類似表現としては、江湖疏「松東帰住東福」（第一巻）がある。江湖疏とは、新たに入寺し、就任する住職に対して、関係する周囲の寺院からの祝辞であり、景徐は東福寺一八一代住職東帰光松の再任にあたり、江湖疏の執筆を担当した。そこでは、再任を要請された東帰光松が「禪師堅拒、而官命所逼（禪師は堅く拒めども、官命の逼る所）」のため、仕方がなく就任したところ、「江湖傳斯盛舉、聳動鷗看驚聽（江湖 斯の盛舉傳はるや、聳動し鷗は看驚は聽く）」となったと描く。ここの「江湖」は地方の小さい寺院を指し、なおかつ、鷗や鷺が住む場所である川や湖もかけている。そこで、水鳥である鷗と鷺が驚いて動揺しているとするすることで、東帰光松が居た寺院を鷗のいる場所に譬え、悠々とした隠遁生活に背く大きい官寺への抵抗が窺える。

以上、景徐の詩文にある驚いた鷗の関連表現を分析したが、作者は世間と絶縁している鷗や鷺が人の出世を見て驚く描写を借りて、その厭世の性格と脱俗のイメージを描き出している。

2.2 無鷗

驚く鷗がいるのは、そこが隠者の住む世界だからである。景徐周麟の実際の生活空間は、隠者の世界ではなかった。そのため、実生活を詠う詩では、「無鷗」「無白鷗」の表現もよく使われている。北宋・黄庭堅には「近人積水無鷗鷺（人に近き積水鷗鷺無し）」（「病起荆江亭即事十首」其の一⁽¹⁶⁾）の句で、俗世間にある水たまりには鷗や鷺がいない描写を借りて、世間に現れない鷗のイメージを描いている。景徐もこの句を念頭において、詩「次韻西山陽谷少年試筆 又代人」（第三巻）において「積水無鷗奈近人（積水に鷗無し 奈んぞ人に近づかん）」句を書いた。

鷗は何故いないのか。それは、『列子』にあったように機心のある人間に近づかない鷗は、無為自然の世界にいるものだからである。『列子』と同じく道家經典である東晋・葛洪『抱朴子』外篇詰鮑篇⁽¹⁷⁾では、古の理想的な世界を描写して、「涉澤而鷗鳥不飛、入林而狐兔不驚、勢利不萌、禍亂不作、干戈不用、城池不設、萬物玄同、相忘於道（澤を涉れども鷗鳥飛ばず、林に入れども狐兔驚かず、勢利萌さず、禍亂^{おこ}作らず、干戈用ひず、城池設けず、萬物玄同し、道に於いて相忘る。）」とある。これは逆にいえば、そうではない世界には鷗がいない、とい

うことになる。景徐の詩には、城池、王城に現れない鷗のことを詠出することによって、その道に従い、世間から離れた道人、隠者のイメージを浮かび上がらせる。

例えば、詩「次大調韻」（第三卷）について分析したい。

不羨青雲接貴游 青雲の貴游に接することを羨まず
 湖辺小集最風流 湖辺に小集すること最も風流なり
 滔滔平地是非海 滔滔たる平地は是れ海に非ず
 開關王城無白鷗 王城を開關すれども白鷗無し

「貴游」は高官や貴族たちと交遊することであるが、それを否定し、湖辺での小集こそが風流であるとの価値表明をしている。広々としている平地であり王城に住む身ではあるが、海ではなく、高潔なる海鷗がいないため、そこは理想の土地ではないのである。

このような「王城無白鷗」の表現は、景徐の他の詩にも見られる。類似した作品として、「便面」（第四卷）一首が挙げられる。

瀑自雲端疊雪流 瀑は雲端自り雪を疊ねて流れ
 人間鬧熱一時休 人間の鬧熱一時休む
 市聲四面心春水 市聲四面にして心は春水
 不道王城無白漚 王城に白漚無きこと道はず

ここにおける「漚」は『列子』と同じく漚で鷗を表している。便面に描かれる瀑布を鑑賞するうちに、世の中の喧騒が一瞬止んだように感じる。俗世間にあっては四方から声がするけれど、心は春の（鷗がいるような）川辺にある。今、王城に、白鷗がいないとの嘆きは言わない。景徐周麟のいる王城には当然鷗はいない、しかし、便面の中の瀑布に鷗のいる春水を連想して詠じることで、心の慰めとしている。

また、詩「鷗泛春」（第四卷）には、

雪羽霜毛風日晴 雪羽霜毛 風日晴れ
 不聞鷗泛在王城 鷗の泛かびて王城に在るを聞かず
 探花使者春何處 花を探す使者 春何處
 恐向江湖認得聲 恐らく江湖に向いて聲を認め得ん

承句は同じく王城に鷗がいないことを詠む。その鷗はどこにいるのか。結句では、江湖でその鳴き声を聞くことができるだろうと締めくくる。鷗は江湖に生まれ、生きる鳥である。鷗のイメージと「江湖」を緊密につなげた詩人を遡ると、黄庭堅の詩によくこの二つの縁語が出ているのが目立つ。黄庭堅には、「夢作白鷗去、江湖水黏天（夢に白鷗と作りて去り、江湖水 天に黏く）」（「次韻師厚病間十首」其の六⁽¹⁸⁾）や「夢作白鷗去、江南水如天（夢に白鷗と作りて去り、江南 水は天の如し）」（「次韻楊明叔見餞十首」其の十⁽¹⁹⁾）などの句がある。江湖は隠遁の地として広く認識されていた。

本節では、「鷗」の関連概念の「忘機」を主な考察内容とし、「驚鷗」、「無鷗」の表現を

分析し、鷗の世間と無縁で、俗世に離れる隠遁な情趣を明らかにした。景徐は、鷗は王城にはおらず、「江湖」にいることを詠出していた。この江湖はただの川や湖という意味ではない。小さな禅院があったり、隠者が暮らしたりする人里離れた土地としての江湖である。そして、景徐の詩には、江湖にいる鷗が多く詠まれている。次節では、江湖の鷗について分析する。

3. 江湖の鷗

3.1 閑鷗

黄庭堅は長篇の古詩「演雅」⁽²⁰⁾において、桑蚕、蛛蝥、春蛙、蟬、螳螂、土蚓、鷄、雀、鷺鷥、鸚鵡などの鳥虫名を多く引用して、当時の官吏の齷齪する様を風刺する一方、詩の最終聯で「江南野水碧於天 中有白鷗閑似我（江南野水天よりも碧なり 中に白鷗有り閑なること我に似たり）」と、江湖にいる鷗を、長閑な自分に喩え、鷗が閑なるものであるイメージを詠出した。五山文学では、この詩句を活かした作や「鷗閑」、「白鷗閑」の詩語がよく現れ、広く受容されている。中川徳之助氏の指摘では、鷗のこの「閑」の属性は鷗の基底的性格の「忘機」に最も密着し、その概念のひろがりや深みにおいて、他に勝っているという⁽²¹⁾。また、黄庭堅の「清閑處士頌」⁽²²⁾では、「萬法本閑、而人自擾擾爾（萬法本より閑なり、而れども人は自ら擾擾たり）」と主張し、士の「清閑」という生き方を唱える。景徐周麟は文「耕閑軒記」（第七卷）において、交遊や宴飲に多忙な日々を送る中でも、「以心地爲寛閑之野（心地を以て寛閑の野と爲す）」の生活を描くことを借りて、命名を依頼された「耕閑軒」の意味を説明している。「寛閑之野」は唐・韓愈「答崔立之書」⁽²³⁾の「耕於寛閑之野、釣於寂寞之濱（寛閑の野に耕し、寂寞の濱に釣る）」の句に拠ったものである。景徐は「耕閑軒記」において、「閑」の道を論じ、「安貧楽道」の生き方を唱えている。景徐は「心閑」という「心」の「閑」への追求を続け、「心地」を「寛閑之野」とし、閑静・清閑な生活への憧憬を吐露している。景徐の「鷗」詩にもよくこういう閑静な詩境が作られている。

一例として、文明九年（一四七七）蔭涼軒主の益之宗箴が寮舎を新築したことを祝う詩会において作成した落成賀詩「春江白鷗」⁽²⁴⁾（第三卷）をとりあげる。

日日沙鷗往又還　　日日沙鷗往きて又た還り
 斜風細雨小漁灣　　斜めなる風　細き雨　小さき漁灣
 人門世事春江外　　人門世事　春江の外
 不有此清與此閑　　此の清と此の閑と有らず

起句に沙鷗との往来を詠出し、承句は唐・張志和の詞「漁歌子」⁽²⁵⁾「西塞山前白鷺飛　桃花流水鱖魚肥　青箬笠、綠蓑衣　斜風細雨不須歸（西塞山前　白鷺飛び　桃花流水　鱖魚肥ゆ　青き箬笠、緑の蓑衣　斜風細雨　歸るを須ひず）」の句を踏まえる。張志和、字は玄真子、唐の詩人、道人、隠者である。その詞「漁父詞」五首は湖州城西の西塞山で作ったもので、長閑

で愉快的隠遁生活を描いている。「漁父詞」、特に其の一であるこの「漁歌子」は宋になって非常に尊敬され、模倣作が多く作られた。宋・胡仔『苕溪漁隱叢話』前集卷四十八⁽²⁶⁾には蘇軾が黃庭堅の模倣作を評価する内容がある。また同書後集卷三十九⁽²⁷⁾には鮑慎が黃庭堅が張志和の「漁父詞」を「雅有遠韻」だと称賛していると語ったとの記事がある。五山禅林は蘇黄尊重のため、「漁歌子」も五山僧が十分知り得た作品であり、その「斜風細雨」の表現も愛用され、漁舟、漁夫のイメージを多く詠みこんだ。景徐の詩の転、結句はこの「漁歌子」における明快な雰囲気を借りて、清らかな春江にいる鷗と戯れる自由な詩境を展開している。

また、依頼されて書いた扇や絵画を詠じる詩においても、鷗を見れば、隠逸と絡めてその自身の鷗への憧れを表出させる作が多く見られる。

例えば、詩「扇面白鷗」（第三卷）である。

心事君其問水濱　心事　君其れ水濱に問ふ
 出門九陌是黃塵　門を出でて九陌は是れ黃塵なり
 鷗邊分席若容我　鷗邊　席を分け若し我を容るれば
 五白相呼作六人　五白相呼びて六人と作さん

「九陌」、「黃塵」はそれぞれ都市の大通りと黄色い土けむりであり、先にあげた詩にある「王城」や「世事」に関連する語で、作者にとっての現実世界を指す。景徐は京都の五山に居り、寺務や政務に追われる身分である。このような現実世界から離れ、「鷗邊」に居り、戯れるような口調で五白こと五羽の鷗⁽²⁸⁾と友になりたい希望を詠出するが、この詩にある「鷗邊」、「相呼」の語は、中川徳之助氏が指摘した「信」の概念表現「約鷗」に近く、鷗への親愛感を見いだせる。

景徐周麟にとっての鷗とは、実際に目にする鳥ではなく、精神世界で交遊する相手なのであった。そして、さらには、景徐周麟本人が夢で鷗となる。

以下の詩「扇面」（第三卷）を取り上げて説明する。

幾度君家夢作鷗　幾度君家夢に鷗と作る
 硯池倒影讀書樓　硯池に讀書樓を倒影す
 西湖縮地梅千樹　西湖地を縮めて梅千樹
 一段清香凝不流　一段の清香　凝りて流れず

おそらく扇面に鷗が描かれていたのだろう。その自由に飛んでいる鷗の姿を見ながら、起句では何度も夢の中で鷗になったことを述べる。それは、鷗への憧れである。実際に、景徐周麟は夢についてよく感慨し、その文「夢記」（第九卷）では「夢與覚、無二無別（夢と覚と、無二無別なり）」という感慨を述べているが、夢を見ることと目が覚めていることは同じく、悟道を妨げないどころか、むしろ夢の中でこそ解放され、「夢作鷗」によって、作者の精神世界が無限に拡大できるとする。なお、この詩の転句の「西湖縮地梅千樹」は北宋・林和靖が西湖に千本の梅を植え、隠居した故事からの示唆である。「縮地」は土地自体を縮めることで距

離を接近させる仙術だというのが、景徐はこの「縮地」の仙術を用い、西湖の畔を自らの居住地に引き寄せ、そこに梅千本を植え、林和靖のような隠居生活をすることを想像している。

景徐周麟は江湖に身を置かない、置けない。その中で、扇面や絵画を媒介に、精神世界における寛閑の野、隠逸の鷗を描き出し、自身の世間から離れた精神の天地を表現している。

3.2. 具眼鷗

景徐の文「書扇面」（第九卷）には、「具眼鷗」が詠まれる。

渺然江湖、忽落吾手、萬里滄浪、蘆葦夾岸。吾買小舟而欲往此間、或尋張志和於西塞斜風細雨、或訪謝三郎於南臺月明、吾欲以此終年焉、傍人指點曰、是便面也、予曰、吾知之矣、自其同者視之、紅塵紫陌即江湖、金馬玉堂即江湖、江湖不碍人、獨白鷗之具眼在耳。吁、此畫乃古人所謂教外別伝輞川圖者乎、于時夏日漸熱、清風起於蘆葦之末、自謂江湖上之人也。

渺然たる江湖、忽ち吾が手に落ち、萬里の滄浪、蘆葦は岸を夾む。吾は小舟を買ひて此の間に往かんと欲す。或いは張志和を西塞の斜風細雨に尋ね、或いは謝三郎を南臺の月明るきに訪ふ、吾は此れを以て年を終へんと欲す、傍人指點して曰く、是れ便面なり、予曰く、吾之を知れり、自ら其れ同じき者之を視れば、紅塵紫陌は即ち江湖、金馬玉堂は即ち江湖、江湖人を碍げず、獨り白鷗の具眼在るのみ。吁、此の畫乃ち古人の所謂教外別伝の輞川圖か、時に于て夏日漸く熱く、清風蘆葦の末より起こり、自ら江湖上の人なりと謂ふ。

作者は扇面を見て、渺然たる江湖が忽然我が手に入った感じがし、小舟を買ってその中行こうとする。この舟で張志和の風が斜めに吹き、雨が細かに降る西塞山を訪れてもいいし、あるいは謝三郎の月明かりに照らされた南台江を訪ねてもいいと想像力を働かせ、図画の世界を現実世界にし、江湖を往来することを想像している。張志和は、先に出てきた「漁歌子」を踏まえており、謝三郎は玄沙師備禪師のことである。師備禪師の俗姓は謝で、三男であるために「謝三郎」と呼ばれる。『宋高僧伝』卷十三の⁽²⁹⁾伝には、「釈師備、俗姓謝、閩人也。少而憨黠、酷好垂釣、往往泛小艇南臺江自娛（釈師備、欲姓は謝、閩の人なり。少くして憨黠なりて、酷はだ垂釣を好む、往々にして小艇を南臺江に泛べて自ら娛しむ。）」とあり、宋代文学において、よく隠者として描かれる。

朝倉尚氏が、景徐周麟は、詩を作る際、観念世界の展開や独自の発想が特徴である⁽³⁰⁾と論じているように、景徐が求める隠逸とは、詩文の創作を借りて、観念世界を無限に拡大させ、寛閑な境地を持つ隠である。文明十六年（一四八四）の作で、大内氏帰依僧として名高い以参周省の京都相国寺住持補任を祝する入寺疏である「以参（周省）住相国」（第一卷）には、「京洛塵多、大隱朝市小隱林藪（京洛塵多し、大隱は朝市小隱は林藪）」という句があり、以参周省の住持就任を祝い、地方の小さい禅寺における「小隱」ではなく、朝市（朝廷、塵世、名利

の場などを指す)にあるが、京洛の寺(相国寺)においても「大隠」が実践できると強調している。

ここでは西晋・王康琚「反招隠詩」以来の、日本でも奈良、平安朝の漢詩文や『正法眼蔵』などでも触れられてきた大隠小隠のことを引き合いに出している。

北宋・范仲淹が「岳陽樓記」⁽³¹⁾には「居廟堂之高、則憂其民、處江湖之遠、則憂其君(廟堂の高きに居りては、則ち其の民を憂へ、江湖の遠きに處りては、則ち其の君を憂ふるなり)」と述べている。五山禪林においては、京洛の大きい寺は「廟堂之高」であり、地方の小さい寺院は「江湖之遠」に当たる。景徐の詩「又次韻歲寒老人達磨忌之作」(第六卷)には、「身居洛北古禪院、心在城南潛邸祠(身は洛北の古禪院に居りて、心は城南の潛邸祠に在り)」と、小さい寺院などや身を隠せるような潛邸においてひっそりと隠遁生活を送りたい心情が表されている。また、「江湖」は黄庭堅が取り上げた、所謂隠遁の地の象徴でもあるが、景徐の作品は、「湖邊」、「湖隱」、「西湖」などの語を多用し、それらが代表する自然、山林の隠遁への執着も見られる。しかし、小さい寺での隠棲にせよ、山林を楽しみような隠遁にせよ、官寺にいる景徐周麟にとっては実現が難しく、本稿はじめに掲げた「書隱」其三のように、景徐は大隠を書隱と再定義し、書物に隠棲する人生を送ろうとしていた。この京洛と地方、「廟堂」と「江湖」という現実と理想の矛盾及び、「書隱」の志向とその実現こそ、景徐周麟の隠逸詩の二大主題であり、最も大きな特徴と考えられる。その中で、「鷗」の観念形象が重要な役割を果たしているのだ。

「書扇面」に「江湖不碍人、獨白鷗之具眼在耳」とあったように、江湖自体は人間を拒否しない、ただ、具眼の鷗がそこにいる。具眼とは物事を弁える眼力のことであり、鷗には人の機心の有無を見抜く力があるので、「具眼鷗」だという。中川氏は「具眼鷗」の例はいずれも室町時代中期以降の禪僧の作に見られると指摘し、また、中国の詩文にほとんど見られない表現だとする⁽³¹⁾。疏「芳卿隣西堂住三聖」(第一卷)には「門庭如水、東山昔玩具眼鷗(門庭水の如く、東山昔具眼鷗を遊ぶ)」というように、当時の禪僧らは自らの門庭を鷗の訪れる水辺のようだとし、具眼鷗と戯れたことを回想する。万里集九「浴布袋傍有蔣摩訶見其背上眼圖」(『梅花無盡蔵』(第三卷))では、「莫道白鷗元具眼、浴聲未止暮江西(白鷗は元具眼するを道ふ莫れ、聲を浴びること未だ止まず 暮江西の西)」の句がある。万里集九は文明三年(一四七一)に美濃において還俗し、鷗の同参になったという。其の詩「一枝老人作挽詞二篇」其二(『梅花無盡蔵』(第三卷))には「暮年老伴鷗今一、爲慰余哀硯掃塵(暮年の老伴 鷗今一なり、余の哀れみを慰める爲に硯は塵を掃く)」の句があり、鷗を老後の友とした還俗生活を描く、これは中川氏の指摘によれば、隠居することで、鷗の同参(仲間)になったという。鉄山宗純の詩「大徳寺退院」(『金鉄集』)にも「若向湘江回棹去、白鷗具眼舊同参。(若し湘江に向ひて棹を回して去れば、白鷗は具眼にして舊き同参なり。)」の句があり、室町中期以降の禪僧の間では、鷗を同参とする風潮が窺える。景徐周麟もこれまでとりあ

げてきた例のように、人に道号や齋号などを与える際によく鷗のイメージを想定し、使用していた。これは、具眼鷗に同参として認められるような高潔な人物であれという意図も込められていたのかもしれない。

景徐周麟は純粹に道の追求を徹底した僧であり、延徳三年（一四九一）三月十五日亀泉集証は將軍足利義材の側近白次であった葉室光忠に、景徐周麟を推挙する記事において、景徐は「才力過人、殊其心法不混当代之人（才力人を過ぐ。殊に其の心法は当代の人を混じらず）」（『鹿苑日録』延徳三年三月十五日条）だとし、心法、則ちその悟道のレベルは当代の僧たちと同一ではない優れた存在であった。景徐にとって、鷗は隱者を指す一方、悟道の友、同参でもあり、その隱は儒家の風雅でもあり、道の仙界飄渺でもあり、禪の山林の樂でもあった。「書扇面」の最後に、「此畫乃古人所謂教外別伝輞川圖者乎」とあるのは、唐の王維が四十四歳から藍田県（陝西省）における輞川に隱棲したことを意識した表現である。王維は詩仏と称えられるが、絵画にも優れ、その輞川にある清源寺に描いた壁画「輞川圖」は隱居の地輞川莊を中心にして、適意、自在な画境が作られ、後世高く評価された。王維は輞川で詩画に陶醉し、仏に参じた生活を送った。王維の「輞川圖」は禪味に溢れ、禪の主旨である「教外別伝」の意趣を得ている。景徐は王維の「輞川圖」を借りて、眼の前の扇面の図画に描かれる「江湖」も同じく、教外別伝の効果があるとしたのである。

このように、詩文に任せ、その世界で舟に乗り、江湖生活、隱逸生活を想像するのは、景徐の詩作における一大主題であり、鷗が作者の精神的隱逸の大事な仮託物となっている。

最後に、「釣魚舟」（第六卷）という詩を取り上げる。

漁翁兩兩刺篙過	漁翁は兩兩にして篙を刺して過ぎ
何用鷗夷功已成	何を用て鷗夷の功已に成る
蓑底不包金馬夢	蓑底 金馬の夢を包まず
磯頭只被白鷗迎	磯頭 只白鷗に迎へらる
沙村有酒三盃醉	沙村に酒有り三盃にして酔ひ
野渡無人一笛橫	野渡に人無く一笛横たはる
憶昔買魚從此放	昔を憶へば魚を買ひて此 <small>こゝ</small> 従り放ちて
滿川風月照山櫻	滿川風月 山櫻を照らす

この詩は景徐が漁翁に自分を投影している情景を描いた詩である。「鷗夷」は春秋時代越国の大臣范蠡のことで、范蠡は功を成した後、隱士となった。「金馬夢」という出世の夢を捨てて、波打ち際において、ただ鷗に迎えられたく、鷗としか一緒にいたくない心情を表し、鷗と信頼関係にある漁翁のことを描き出している。六句目は「野渡無人一笛橫」は唐の山水田園派詩人韋応物の詩「滁州西澗」⁽³²⁾の「春潮帶雨晚來急 野渡無人舟自橫（春潮雨を帯びて晚來急なり 野渡人無く舟自ら横たはる）」句を転用し、この渡し場には人影もなく、淡白、寧靜な詩境を作った。

五山文学では、詩画軸鑑賞による唱和や関連する作詩依頼がある。景徐周麟は画軸などを見ながら、観念世界の展開により、思いを馳せ、様々な典故を引用し、江湖にいる鷗に仮託し、隠逸の志向を表している。

このように、景徐周麟の詩文における「鷗」のイメージからして、その隠逸志向が最も強いと見られることが窺える。その隠逸志向が比較的はっきりとわかる詩が圧倒的に多く、上述したように、京洛と地方、「廟堂」と「江湖」の矛盾が多く見られる一方、「書隠」という景徐ならではの隠逸手段から、詩画軸鑑賞にしても、自然風物描写にしても、そういう世事や黄塵に煩わされず、悠々とした隠遁生活を想像をしながら詠出する。さらに、その広大な観念世界による典拠引用や詩想によって、古人と対話し、古来より詠まれる風物や特定地名などを遡り、自らの価値観によって詩を詠出し、独自の精神的隠遁を作ったということがその作品の大きな特徴である。

おわりに

本稿は五山文学作家景徐周麟の作品における「鷗」に注目し、景徐の隠逸思想との関連に主眼を置き、その様相を分析した。景徐の詩にある鷗に関する表現から見て、ほかの僧たちに比べると、「忘機」など従来慣用される表現に拘らず、鷗が驚く関連表現や、「無鷗」、「王城無白鷗」など個性のある表現を用いる。また、詩想を展開し、廬山十八賢など人物画を鑑賞する場合、鷗を想像によって登場させるなり、自分ならではの、中身が豊富で深い鷗詩を作っている。その詩文における「鷗」は作者の精神世界において仮託され、高踏で儒者の風雅があり、朝市や俗塵に離れる隠者であり、書や画の世界にあって往還する友でもある。また、ほかの五山作家が鷗の性格や観念形象のみを描くことが多いのに比べ、鷗と「相呼」し、自らが鷗になることまでをも想像するのが特徴である。景徐は隠逸世界におけるもっとも大事な仮託である「鷗」を借りて、精神世界の隠逸、さらに真隠と思われる「書隠」を実現させた。

注

(1) 本稿における景徐周麟の詩文は上村観光編、景徐周麟『翰林葫蘆集』（『五山文学全集』第四巻、思文閣、一九九二年）による。作品題のあとに出处の巻数を示す。一部俗字を正字に改めた。

(2) 拙稿「景徐周麟隠逸思想研究」（『中韓研究学刊』、総第十五輯、二〇一四年）一九五～二〇六頁において、景徐周麟の隠逸思想を考察し、その「心隠」の志向、「書隠」の人

生、平明閑逸な詩風を考察した。

(3) 「送諸葛覺住隨州讀書」唐・韓愈撰、宋・魏仲舉集注、郝潤華、王東峰整理『五百家注韓昌黎集』（中華書局、中国古典文学基本叢書、二〇一九年）第二冊、四五六頁。冒頭二句に「鄴侯家多書、挿架三萬軸」とある。

(4) 中川徳之助「「白鷗」考—禅林文学の詩想についての一考察」『日本中世禅林文学論攷』（清文堂出版、一九九九年）所収、一〇五～一〇六頁、一三〇頁。初出は「白鷗の辞（一）～（三）」（一九五七～一九六四年）。

(5) 「演雅六言」宋・楊万里撰、辛更儒箋校『楊万里集箋校』（中華書局、二〇〇七年）第四冊卷三十八、一九七七頁—一九七八頁。

(6) 「浦鷗」宋・羅大経撰、王瑞来点校『鶴林玉露』（中華書局、一九八三年）卷之五、八七頁。

(7) 前掲注(4) 中川徳之助「「白鷗」考」、八八頁。

(8) 「清閑處士頌」劉琳、李勇先他校点『黄庭堅全集』（『宋黄文節公全集』、四川大学出版社、二〇〇一年）正集卷第三、五八九頁。

(9) 藤卷尚子「中世禅林における中国文化の受容——「碧山日録」内「匡廬十八賢図」鑑賞記事を中心に——」（『国文学研究』一五一卷、早稲田大学国文学会、二〇〇七年）参照。

(10) 「望廬山瀑布二首」其二 唐・李白、清・王琦輯注『李太白全集』（中華書局、一九五七年）第三冊卷之二十一、一〇一四頁。

(11) 楊伯峻撰『列子集釈』（中華書局、一九七九年）卷第二・皇帝篇、六七—六八頁。

(12) 「山居賦」顧紹柏校注『謝靈運集校注』（中州古籍出版社、一九八七年）文類（編年、三一八頁）。

(13) 「贈田叟」吳慧『李商隱詩要注新箋（下）』（方志出版社、二〇一〇年）編年詩・卷十五、一〇四—一〇五頁。

(14) 「海翁説」上村觀光編、義堂周信『空華集』（『五山文学全集』、思文閣、一九九二年）第二冊卷第十五、四二—四三頁。

(15) 「鷗鷗」の表現について前掲中川徳之助「「白鷗」考」、四十五頁では「鷗不鷗」、「鷗飛」などの語が「忘機」と同様に、心境を表現する言葉として言及され、用例があげられている。

(16) 「病起荊江亭即事十首」其一 前掲注(8) 第一冊、正集卷第九、二二—二三頁。

(17) 楊明照『抱朴子外篇校箋』下（中華書局、一九九七年）四十八・詰鮑、四九九頁。

(18) 「次韻師厚病間十首」其六 前掲注(8) 第一冊、外集卷第二、九〇—九一頁。

(19) 「次韻楊明叔見錢十首」其十 前掲注(8) 第一冊、正集卷第三、五七—五八頁。

(20) 「演雅」前掲注(8) 第一冊、正集卷第五、一〇—一一頁。

- (21) 前掲注(4) 中川徳之助「白鷗考」、一〇六頁。
- (22) 「清閑處士頌」前掲注(8) 第一冊、正集卷第三、五八九頁。
- (23) 「答崔立之書」『新刊五百家注音辨昌黎先生文集』（『日本五山版漢籍善本集刊』、人民出版社・西南師範大学出版社、二〇一三年）第四冊第十五、六〇六頁。
- (24) 朝倉尚「景徐周麟伝記考」（『岡山大学教養部紀要』十五、一九七九年）、一九頁。
- (25) 「漁歌子」曾昭岷、曹濟平他編撰『前唐五代詞』（中華書局、一九九九年）正編卷一・張志和、二五頁。
- (26) 宋・胡仔纂集、廖徳明校点、周本淳重訂『苕溪漁隱叢話』（人民文学出版社、一九九三年）前集卷四十八・山谷、三四一頁。「東坡云「魯直作漁父詞云「新婦機頭眉黛愁、女兒浦口眼波秋、驚魚錯認月沈鈎、青莢笠前無限事、緑蓑衣底一時休。斜風細雨轉舡頭。」其辭清新婉麗、聞其得意、自言「以水光山色、替却玉肌花貌、此乃眞得漁父家風也。然才出新婦磯、又入兒女浦、此漁父眞乃太瀾浪也。」
- (27) 前掲注(26) 後集卷三十九・長短句、三四三頁。
- (28) 朝倉尚「景徐周麟の文筆活動——文明十五年と文明十六年」（『地域文化研究』十二、一九八六年）、四二頁。
- (29) 宋・贊寧等撰『宋高僧傳』卷十三「梁福州玄沙院師備伝」（『大正新脩大藏經』史傳部・第五十卷）。
- (30) 朝倉尚「景徐周麟伝記考——修練期の文筆業」（『岡山大学教養部紀要』十五、一九七九年）などの論文を参照。
- (31) 宋・呂祖謙、斎治平点校『宋文鑑』（中）（中華書局、一九九二年）、一一一六頁。
- (32) 前掲注(4) 中川徳之助「白鷗考」、一七一頁。
- (33) 「滁州西澗」陶敏、王友勝校注『韋応物集校注』（上海古籍出版社、二〇一一年）卷八・雜興、五三四頁。